

## ロールシャッハテストの解釈事例

氏 原 寛

### An interpretation of a Rorschach Protocol

HIROSHI UJIHARA

#### はじめに

ロールシャッハテストについては、その“客観的”な妥当性について疑問が投げかけられてから久しい。しかしその“臨床的”妥当性を認める主張もあいかわらず根強いし、わが国で、依然としてこのテストに熱意を示す若い実践家の数は決して少なくない。そのへんの微妙なアヤについては、すでにいくつかの機会に考察したこともある<sup>1,2)</sup>ので、ここでくり返すことはしない。ただ、いわゆる“臨床的”妥当性とされていることが一体何を指すのかが明らかでないと、近頃みうけられる心理テスト一般に対する不信任<sup>3)</sup>を拭いさることが難しいのではないか。だからその点について、現在筆者がどのように考えているかを、はじめに少しのべておきたい。

簡単にいえば、テストを施行する方がしない場合よりも被験者の役に立つ、という見通しがない限り、どのようなテストであれやるべきでない、というのが私の考えである。もちろん役に立つと思ってやったけれども、結果的にはあまり役に立てなかった、ということはあるかもしれない。それは、以後一層の精進を重ねて、そういうことが再び起こらぬよう努めるより仕方がない。しかし時にみうけられる、一種のルーティンワークとして、これといった目的もなくテストを施行することだけは避けなければならない。

ところで「役に立つ」ということであるが、ロールシャッハテストについて限っていえば、テスト所見によってそれ以外の方法では得られない被験者についての情報が得られること、とくに、もしテスターがカウンセラーとして被験者をひきうける場合、どのようなプロセスが予想され、最終的にはどのような状態が見通せるか、がある程度明らかにしなければならない。しかしそこから得られる情報は、解釈者のフィルターを通してのものにならざるをえないので、かなり主観的なものになる。実

はそこにこのテストの面白味があるのだが、“客観性”を尊重する側からいえば、そこが問題なのであろう。それについてここで論ずる余裕はないけれども、近頃、男性的ないわゆる「哲学の知」に対して女性的叡知としての「パトスの知」がうんぬんされることがある<sup>4)</sup>。これはいわば、おのれの肉体を通してはじめて認識しうる知恵である。心理テストに限らず、カウンセリングや心理治療でとくに不可欠とされる共感性は、おそらくそのような認識と深く関わりあっている。そして、本来主観的なそのような知が、深い所では案外の普通性をもつことは、多くのいわゆる神秘体験に、洋の東西を問わず、意外な程の共通性のあることによって明らかである。

いずれにせよ、テストを施行することによって、カウンセラーとしてクライアントとの一層深い関わり（実はこのことの意味が問題なのであるが、本稿ではとりあげない。しいていえば、上述のお互いの共感の一層高まった関係といえようか）が可能になり、クライアントの状況が少しでも改善されることがなければ、折角のテストをわざわざやるだけの甲斐もない。以下に一つの解釈例を示すのは、以上のべたことが、実際のプロトコルからどのように具体化されるのかを示すためである。

#### 1 被験者

被験者は32才の男性である。大学卒業後、某寺に住みこみ修業中自閉状態となり、家人にひきとられる。1年間自宅でブラブラする。後、2つの病院に前後4回入院退院をくり返す。テスト時現在、社会復帰教室に通っていた。

なおこのプロトコルは、われわれの教室で教員と院生が行っている定例の研究会に、院生の加藤豊比古の提供したものである。同君がこのテストに関する経験を豊かにするために、被験者の協力をえてテストを実施した。

はじめての病的な被験者であったため、テスターはかなり緊張したという。だからいわゆる臨床場面で行われたテストではない。テストがどういう状態で行われたかはテスト結果にかなりの影響を及ぼす。それらをどう考えるかはテストシチュエーションの問題として多くの人が論じている<sup>5)</sup>が、ここでは触れない。

## II プロトコールとスコアリング(領域は阪大法<sup>6)</sup>による)

っているが、それ以外はすべてKlopfer<sup>8)</sup>による)

I カード 5秒。コーモリ 14秒。仮面。全体が顔のよう。17秒。

[質疑] ここ(D<sub>2</sub>)が羽でこうなって(なぞる)。ここ(S)が目で。

1. W	F	A	P	1.0
2. WS	F	Mask		1.0

II カード 10秒。人間が二人手を合わせているかなあ。15秒。骨盤みたい。39秒。

[質疑] ここ(D<sub>3</sub>)が頭でここ(d<sub>1</sub>)手で、胸(D<sub>2</sub>)で足。(黒い所D<sub>2</sub>をさして)こうなってて。(下の赤い所は?)別に考えてませんが。

1. W	M	H		2.5
2. W	F	At		1.0

III カード 5秒。女の人(D<sub>2</sub>)二人がテーブル(D<sub>5</sub>)に手置いているような。欲求不満かな。(えっ。どういうことで? 別に好きなように喋ってくれていいんですよ) 29秒。

[質疑] これが女の人で、テーブル。

1. W	M	H	P	1.5
------	---	---	---	-----

IV カード (カード回転について指示) 10秒。蝶々。20秒。男の人が立ってるみたい。下から見た感じ。45秒。

[質疑] ここ(D<sub>1</sub>)頭で、ここ(d<sub>1</sub>)しっぽで羽広げてる。上から見た感じの。下から見た感じで、これ(d<sub>2</sub>)手で足(D<sub>3</sub>)で、こうなってて、黒いから男という感じ。

1. W	FM	A		1.0
2. W	M, FCsym	H		1.5

V カード 17秒。何かな。22秒。トリが翼広げてる。32秒。

[質疑] ここ(d<sub>3</sub>)頭で足(d<sub>1</sub>)で翼。

1. W	FM	A	P	1.0
------	----	---	---	-----

VI カード 23秒。超音速旅客機みたいな感じ。42秒。

[質疑] ここ(D<sub>1</sub>)前でこうハネ(D<sub>5</sub>)があつて(なぞる)。

1. W	F	Obj		1.0
------	---	-----	--	-----

VII カード V/V 15秒。何か地図みたいな感じする。

△ 28秒。髪の毛をなんか立てて、女の人。50秒。

[質疑] ここ(D<sub>1</sub>)アメリカで、ここ(D<sub>4</sub>)アジア。(全体で?)半分だけ。髪の毛(d<sub>2</sub>)で手(d<sub>3</sub>)で顔で、体(D<sub>4</sub>+D<sub>5</sub>)。(一人?)二人。

1. D	F	Map		1.0
2. W	M, m	H		2.0

VII カード △ 11秒。えー。なんか置き物みたい。動物が二匹おって、何とかグラスとか。知らんけど。44秒。

[質疑] 動物(D<sub>1</sub>)で、ここ(D<sub>4</sub>)がガラスで色のきれいなんの、あんな感じ。全体的に。44秒。

1. W	CF	Obj		0.5
2. D <sup>1</sup>	F	A	→P	1.0

IX カード V 12秒。水爆がボカーンと爆発して、キノコ雲出てる。△ 28秒。果物の半分割ったような。中に種があつて。1分。

[質疑] キノコ(D<sub>5</sub>)で、ここから出る感じ。(ここ(D)は?)ここは関係なく。ここ(d<sub>5</sub>)種あつて(中央のS)じく。

1. D	Fm	expl, imoke		1.0
2. D	F	food		1.0

X カード V 13秒。ワシが峡谷飛んでるみたい。谷間を飛んでる。△ 40秒。仏像。1分8秒。

[質疑] 谷間(D<sub>5</sub>)で、ワシ(D<sub>4</sub>)。坐った仏像が真中にあるような感じ。これ(D<sub>5</sub>)が台のような感じ。

1. Ddr	FM	A		1.0
2. Sdr	F	(H)		1.0

## 量的整理

R:17, T:7'06" T/R:25" T/R<sub>15</sub>:14" T/R<sub>10</sub>:12"  
W:11 D:5 S:1+1 dn:+2 Rej:0  
M:4 FM:3 m:1+1 F:8 C':+1 CF:1  
H:5 A:5 At:1 Obj:2 Map:1 Mask:1  
Expl:1 Food:1 Cl:1+1  
M:FM=4:3 M:(FM+m)=4:4+1 (FM+m):(Fc+c+C')=3+1:+1 F:(FK+Fc)=8:0  
(Fc+c+C'):(FC+CF+C)=+1:1 FC:(CF+C)=0:1 SumC=1 M:SumC=4:1 FL:1,18  
FLw:1,33 (VIII+IX+X)%=35 Succession:  
Loose F%:47 W%:65 D%:30 W:M=11:4

(H+A):(Hd+Ad)=9:0 A%:30 P:4

### III 解 釈

#### 1. 量的分析

ロールシャッハテストと共に、現在臨床的に最も多く使われている投影法はTATである。そして、ロールシャッハが「いかに見るか」をみようとするのに対し、TATは「何を見るか」を確かめるものだ、といわれている。ロールシャッハにも内容分析の手続きがあり、「何をみたか」を明らかにすることは、解釈上ゆるがせにすることができない。しかし、テストの独自性ということになれば、やはり被験者が「いかに見たか」に基づいて考えてゆくことに、より実りの多い結果が期待される。それが以下に示す量的分析の狙いである。

しかし、「いかに見るか」ということには、分ったように分らない所がある。そこでまず、そのことについて少し説明しておきたい。たとえばユング<sup>8)</sup>は、フロイトと自分との相異点を考えることで、人間には外向的な人と内向的な人のいることに気づいた。同じことが、人によってまったく違って受けとめられるのである。そのためお互いの間の共通理解が極度に難しくなることがある。外向的な人は、内向的な人をノイローゼがかった夢想家と思うかもしれないし、内向的な人からみた外向的な人間は、深みのない軽率な人物に映ることが多い。ロールシャッハにも体験型という考え方があり<sup>9)</sup>、内向・外向がうんぬんされるのだが、ロールシャッハ自身は、それらがユングのいう内向・外向とは異っていることを指摘している。もちろんここで、両者の異同を論ずるつもりはないのだが、客観的に同じものならば誰にも同じように見える、とはいえぬことを示すためにとり上げた。「いかに見るか」についてはなおいうべきことが多くあるが、実際の解釈の段階で、より具体的に触れることにする。

##### a 運動反応

動きのない図版に動きを見るのは、図版に融発されて何らかの運動感覚が生じ、それが図版を動いているものと知覚させる、というのがロールシャッハの仮説である<sup>10)</sup>。従って彼およびその正統を継ぐと考えられるベック<sup>11)</sup>らには、運動反応としては人間運動反応しかない。しかし本論のスコアリングはKlopperのカテゴリー<sup>12)</sup>によっている。そしてクロッパーや他のロールシャッハテストの実践家の多くは、人間運動反応以外にも、動物運動反応と無生物運動反応とを認めている<sup>13, 14, 15)</sup>。それぞれの考え方には一理あり、どちらが優れているかはにわかには決め難い。しかし基本的に、被験者自身に何らかの内的な運動感覚が生じていることが、運動反応をスコアス

るための条件であるという点については、意見の一致がある。

図版を客観的な外的世界と考えると、それをどう見るかという場合、主として自身の内的な感覚に基づいて知覚することになれば、外界はそれ自体としてよりも、すでにある内的世界の枠組に応じて再構成されることになる。ということは、外界の変動にいたずらにふり回されることなく、主体としてそれにどう対応するかが可能になることである。その限り、ある程度の成熟、つまり主体性ができ上がっていないと運動反応は出にくいことになる。事実、エームズらの研究<sup>16)</sup>によれば、とくに人間運動反応Mの産出が、小児期から青年期にかけて年令を追うに従って増加してゆくのが分る。

しかし、外界を自分なりに再構成するといっても、それが客観世界とすっかりかけ離れてしまったのでは、現実に対応することができない。従って、再構成された世界は、かなりの程度客観世界を正確に反映していなければならない。それは、反応のもつ形体水準の良否で判断することができる。しかしそれらの問題は、主として形体反応に関わるものであるので、詳しい考察はその折りに譲ることにする。

もちろん、われわれの感覚器官が客観世界を文字通り“客観的”に把握しているかどうかには問題がある。おそらく犬や猫さらにはコーモリや昆虫の知覚している世界と、われわれの知覚している世界は大巾に異なる。どちらの世界がより客観世界に近いかを考えることは、この際ナンセンスである。要は、知覚された世界がそれなりに客観世界に対応し、それぞれの生き物の現実適応に役立てばよいのだから。いずれにせよ、内界と外界は、対立しているようでありながら相補的な面もあり、外界からの刺激を最小限にする感覚遮断実験で、しばしば幻覚様体験の生ずることはよく知られている<sup>17)</sup>。

ところで、被験者には精神病(多分分裂病)体験があったらしい。そして現在通院中である。こういう場合、やはりプロトコールから病的な所見が出るか出ないかが重要である。しかし、R:17は多いとはいえぬにしろ、日本人の場合それ程珍しいことではない。マイナス反応が一つもないことは、それ程偏った知覚の歪みがないことになる。Rej, のないことも著しい抑制がないからであろうし、T/R:25とかT/R<sub>f</sub>:13というの、精神機能がかなりスムーズに流れていることを思わせる。T:7'06"というのは、ただし、テストに深く関わることを避ける、したがって表面軽やかではあってももう一つ外界と深く関われない態度の反映とみられなくもない。しかし、それとてもそれだけで病的と決めつけるには程遠

く、その限り被験者の状態はかなり軽快しているものと考えられる。

以上のことを踏まえて運動反応をみてみると、R:17のうち8つが運動反応である。今までのべてきたことから考えて、この人が、世界を自分なりの枠組で把えてゆく傾向の強いこと、よくいえば主体的、悪くいえば独断的ないし自閉的(詳しい事情は分らないが、この人が寺で修業中自閉的になったということが思い出される)であることが分る。ところで、Klopper<sup>18)</sup>たちが、運動反応を人間運動反応M以外に動物運動反応FMと無生物運動反応mに分けていることはすでにのべた。これらは、運動反応としてはすべて上述の仮説が当てはまるのであるが、細かい所でお互いにかなりニュアンスに差のある反応とされている。

Mは運動の主体が人間であるから、その際仮定されている内的な運動感覚が、比較的自分のものとして感じられている。それだけ意識に近いわけである。運動感覚が生じ、それによって外界の意味を内的枠組に従って読みとること自体、かなりの内的エネルギーの存在を考えねばならないが、時にそれが衝動的に爆発することもあるから、それらがいかに建設的に利用されうるかどうかも考えねばならない。Mの場合、それがいわば ego-syntonic な形であるわけで、それ自体としては望ましいサインなのである。

次にFMについていうと、これは運動の主体が動物であるから、被験者がかりに運動感覚を感じていたとしても、どれだけそれを自分のものと感じているかには疑問がある。そもそもそうした運動感覚を、動物の形で感じるはずがないというのが、ロールシャッハやベックがM以外に運動反応を認めない理由でもあったのである<sup>19, 20)</sup>。しかし筆者は、はっきりした運動感覚がありながら、それを動物の運動とみることは、ロールシャッハ図版の場合かなり多いのではないかと考えている。われわれは「狼のように食う」とか「馬のように飲む」とかいう。その際、まさに狼そのもの、馬そのものの感じを感じているわけではない。人間が狼の食う食う有様をみて勝手に想像した、人間の中のより動物的、ということとはより未分化で低次な部分の働きをそこにみているのである。これと似たことを、高橋<sup>21)</sup>が描画について、マッコーバーの例によって説明している。いずれにしても、動物の形で運動をみた場合、内的な運動感覚がないとはいえないと思う。そこで、それではMとどう違うのかということが問題になるが、私自身はFMの場合の運動感覚は、Mの場合程自分自身のものとして感じられていないのではないかと考えている。それだけ意識から遠く、したがって

自我の統制をうけることが少ない。こういう場合、現実場面で起こることはおそらく投影である。投影とは周知のように、おのれの中の受け入れ難い感情を他人の中に見出す心理機制である。FMは、確かに内的には感じている運動感覚を、自分自身のもの、ということは人間的レベルのものとして受けとめることができず、人間とは異質の、動物のものとして見る反応である。したがって内的な経験を自分自身のものとしてみることができない。その結果、必然的に外界に内界の反映をみることになるから、時に現実に対応しない他者への思いこみのようなものが生ずるかもしれない。ただし、形体の可否が当然問題になるから、形体水準がおかしくない限り、それが直ちに異常な体験、たとえば妄想につながるわけではない。さらにいえば、われわれはしばしば「小川のせせらぎが唱っている」とか「春風が頬にたわむれる」とか「荒波が岩を噛む」といった感じ方をする。それが、「自然の懷に抱かれている」ような自然との一体感にもつながるのだが、こうした経験を支えているのが、いわばFM的な経験様式なのである。つまり、外界が生き生きと、まるで自身と同じように躍動しているものと感じられる。だから、先にMは比較的望ましい反応であるとのべたが、運動反応がMばかりでFMのないのは、コントロールがききすぎて、より大いなるものとのつながりに欠ける性格ということになる。

最後にmについていうと、これは運動の主体が生き物でない場合、したがってその物の運動が何らかの外からの力によって引き起こされているもの、だから動いているというよりは動かされているといった方がよいような運動である。しかも、それが自分自身の感ずる運動感覚に基づいているのだから、一種の獅子身中の虫、動いているのは自分だが運動の主体は別にあるような、極端な場合には作為体験につながるような体験である。しかし、いわゆるコンプレックスが当人によってかすかに感じられている時には、こういう感じ方があるのかもしれない。多くの場合コンプレックスは、当人にそれと気づかれないうるんな作用を及ぼすと考えられているが、mの存在は、それについてある程度の意識があり、それが不安をひき起こすことはあっても、かえって衝動的に事を起こすのにブレーキをかける可能性を示している。これも又、それ自体で望ましいとか望ましくないとかをうんぬんするよりも、他の反応とのバランスからみてゆかねばならぬサインである。

さてこの被験者は、R:17のうち8つが運動反応である。それだけ、自分なりに外界を受けとめているのであろうし、またそれを支えるだけの力もあるのであろう。



形態水準も平均以上であるから、そのような自分なりのうけとめ方が、決して客観性に欠けているわけではない。すでにのべたように、運動反応はかなり主体的ないしは主観的な反応である。それにもかかわらず、それが公共性ないし客観性をもつという感じがあるからこそ、被験者はそのような反応を出せるのである。これは、自分なりの感じ方が十分公共世界にうけ入れられるという、一種の世界との連帯感のごときものを基盤にもっている。もちろん、そこで形体水準に問題のある場合は、そのような主観的な思い込みが客観性をもたないのだからかなり問題である。しかし、この被験者の場合形体水準が悪くないのだからその心配はない。MとFMの比率もまあまあである。つまり、ある程度のエゴのコントロールと内的な動きに身を任しうる柔軟性が考えられる。m:1+1というのもoptimalの範囲に属する。だから運動反応についてみる限り、この被験者にとくに異常は認められない。むしろ、かなりの内的エネルギーの存在が考えられる。この被験者にかつて病的体験があったとすれば、自我の機能はかなり回復しているし、内的エネルギーも豊かであり、相当希望のもてる状態といえる。しかし、ロールシャッハテストの解釈は、つねに他の反応群との関わりにおいてなされねばならない。そこで次に色彩反応についてみることにする。

#### b 色彩反応

ロールシャッハは解釈上体験型(Sum C:M)を重視したが、その後の実践家は内容分析の面白さにひかれてこの比率をあまり重視しなくなった、という<sup>22)</sup>。しかし筆者は「はじめに」でものべたように、ロールシャッハの面白みは量的分析にあると思うし、その際、体験型のもつ重みは決して小さくない、と考えている。さて、この被験者が反応数に比べて多すぎる程の運動反応を、しかしバランスよく出していることはすでにみてきた。それはこの被験者が相当豊かな内的エネルギーの持主であることを思わせる。そのエネルギーがどの程度建設的に費やされているか、それを示す指標の一つが体験型である、と私は考えている。

色彩反応は、元来外界に対する受動的なありようを示す、といわれている<sup>23,24)</sup>。後にのべる形体反応とすでにのべた運動反応は、方向は異なるとはいえ、自我の外界に対する能動的な態度を反映している。しかし色彩反応は、外界の刺激に対してそれが何であるかを積極的に意味づける前に、まず主体が動かされてしまうような経験を表わす。われわれは色彩刺激をまず感じてしまうのであり、自我が主体的に関わるのはその後のことなのである。ある種の宗教体験、あるいはすばらしい音楽や美術

に接して、「我を失って」感動するような場合がそれにあたる。そもそも感情というものが、まず感じてしまうのであり、それがどんな気持であるのかは後で分るものである。われわれは、気がついたら嬉しさがこみ上げていたり、はらわたが煮えくり返っていたりするのである。意図的にこう感じようとしても決してできるものではない。つまり、われわれが色彩刺激を経験する仕方は、まず動かされ、それから、動かされている自身の状況にどう関わるかということで、感情体験と同じパターンを示すわけである。色彩反応によって、被験者の感情的態度が分るというのはその理由による。

次に考えねばならないのは、われわれがそれと知らず感情的に動かされてしまう場面は、ほとんどが対人関係場面だということである。そういう場合、しばしば自分自身の意図に逆らって、感情の方が動いてしまう。だから色彩反応は、対人関係の中で被験者がどのように動くのかについても、相当な知見をもたらしてくれる。色彩に対して大らかに反応する被験者は、おそらく対人関係でもこたわりなく動ける人と考えてよい。

ところがこの被験者には、色彩反応はCFが一つしかない。それだけ感情的反応に対する強い抑制が考えられる。したがって対人関係においても自由な対応ができていない、と考えねばならない。ところで、この被験者の運動反応が多いこと、したがってその内的エネルギーがかなり豊かであろうことはすでにのべた。そのようなエネルギーが何らかの形で外に向かわないと、多かれ少なかれ被験者は自分だけの空想世界に閉じこもって、現実との関わりがその分薄れてくる可能性が大きい。だからこの被験者の場合、それらのエネルギーが人間関係の中に生かされている可能性は極めて乏しい。しかもたった一つのその反応がCFであることは、それがかなり未分化な形で現われる可能性を示している。また、(VIII+IX+X)率は35であるから、情緒的な刺激場面において適切に反応したい気持は十分にあるわけである。それができていない。だからこの人は、現実の対人関係では何とか関わりたいと思いながらそれができず、さりとてすっかりひっこんでしまうこともしない中途半端な態度をとらざるをえない。そして、たまたま何かの関わりの生じた時は、かなり未分化な反応が現われるのだから、現実の人間関係はおそらく本人にとって満足できるようなものではない。

社会復帰をめざすこのような人に対しては、とくに配慮された人間関係が必要である。共同社会に然るべき位置を占めるのが、治療的にも最も望ましい効果が期待できるからである。しかし、このプロトコールからする限

り、そうした配慮のない“日常的”な人間関係の中で、この人はみずから期待するような役割をとることが難しく、傷つきこそすれ、自らの内的エネルギーを現実場面で十分に活かしているとは思われない。そのことが逆に、一層この人を自分だけの世界に追いやることになりかねない。したがって、芸術的にどうこうというのではなく、この人の内界を他者が分けもつという意味で、何らかの創作活動や宗教活動が望ましい結果につながるかもしれない。そうでなければ、カウンセリングなり心理治療などの、十分に配慮された人間関係が必要であろう。

### c 形体反応

形体反応は、プロットの形からそれが何であるかを決める反応である。物の形はあらかじめ決まっているので、形によって判断する場合、われわれは外界の姿をありのままに受け入れねばならない。イヌにしるヒトにしる、その形はおのずから決まっており、極端に言えば、みんながイヌと見るものがイヌに見えないとか、みんなにはイヌと見えぬものが自分にだけイヌに見えるのは、それだけですでに異常なのである。自我の働きには二つの方向があり、一つは運動反応についてみたように、自分なりの実感に基づいて外界を再構成するもの、いわば世界を自分に合わせようとする働きであり、もう一つは、主観的、恣意的なものは一切排除して、客観世界の現実をありのままに受けとめる方向、いわば世界に自分を合わせる方向である。われわれの経験にはつねにこの二つの方向が含まれており、たとえば運動反応が形体的に客観性を失うと、それが内的な確信とつながっているだけに、いわゆる訂正不能の思いこみに陥りやすいことはすでに述べた。M-の存在が重篤な心的障害を予想させるゆえんである。さりとて外界の決まりのごときものにおのれを合わせるのに汲々としていたのでは、いわゆる拘り定規で紋切り型の固苦しい性格に墮してしまい、自分を生かすことができなくなる。だからどちらの方向がよいとか悪いとかいうことではない。そこでFについても当然そのパーセンテージが問題になるのだが、この被験者の47パーセントという数字はノーマルの範囲内のものである。これが高すぎるのは、何らかの不安のためもっぱら外的尺度におのれを合わせることによって安定を保とうとする試みであり、逆に低すぎるのは、いわゆる即物的態度によって物事を自分からつき放してみることができない、感受性は豊かかもしれないが客観的な方向性に欠ける不安定な性格を考えさせる。この人の場合、ある程度外界に自分を合わせてゆくことは可能であり、さりとて自分を殺してまでそうしているわけではない。それだけ柔軟に現実に対応しうるものと思われる。

ついでながらこの人の平凡反応Pの数値は4である。反応数から考えて、大体こんなものであろう。PはFとやや似た意味をもち、大多数の人が示す反応に対して与えられる。だからこの人も、大抵の人が思うように外界を見ているのだと考えてよい。W%が65というのも、アメリカの標準からみればとも角、日本人の標準ではそれ程大きいズレもなく、そもそもRが少ないのだから、とくに問題としてとり上げる程のことはない。しいていえば、場面全体の意味を何とかくみとろうとする努力が少し強い、ということであろうか。(H+A):9に対し、(Hd+Ad):0というのも、細部より全体というこの人の方向性を示しているのかもしれない。もっともこれはT:7'06"に現われているように、できるだけ表面的にさり気なく、というこの人の外界に対する態度の表われかもしれない。

### d 陰影反応

この人のサイコグラムを一見して、まず気づかれることは陰影反応の皆無なことである。わずかにC'が一つ付加反応としてあるが、これを純粋な陰影反応とみることにはできない。陰影反応については多くのことがいわれているけれども、まだこれといった定説はない。私自身はこれを基本的安定感を示すサインではないか、と考えている。もともと陰影反応は愛情欲求なり依存欲求のサインと考えられていた<sup>25, 26)</sup>。とくに材質反応は、ハーローの実験<sup>27)</sup>以来、赤ん坊の母依存、とくにスキンシップと関わりのある反応とみなされるようになった。十分に母親とのスキンコンタクトをもった人は、たとえ成人になっても、愛情欲求なり依存欲求を失っていない。もっともそれが依然として幼児的なままの現われ方をするか、十分おとなの枠組にはまった上で表現されるかは、陰影反応の質をみなければ分らないことである。ただしこのプロトコールには陰影反応がないので、質の問題については触れないでおく。ただ、おとなのレベルでの愛情欲求なり依存欲求は、対人関係における優しさ、親しみ深さなどと関係するので、多すぎる場合は別であるが、ある程度数値はより円満で成熟したパーソナリティを表わすことは指摘しておきたい。Klopferは(F:Fc+FK)の比率をかなり重くみており、それが4:1以下および4:3以上が問題になるとのべている<sup>28)</sup>。

ところで依存欲求とは人をあてにする態度である。これはしばしば未熟さのしるしとして考えられているけれども、必ずしもそうとはいえぬ面がある。すなわち、当てにすることはそれだけ相手に期待することであり、その背景には対人的な信頼感がある。人を信頼できぬ場合、われわれは人に期待することができない。そのかわり、

自立心は旺盛になる。相手が裏切る場合を予想し、裏切るにも裏切れぬような関係にお互を追いこむのが契約である。その点、友人から借用証書をとるのを何か水臭く感ずる日本人と、そういう場合に当然の自己防衛の処置としての、借用証さえとりえないことを未熟さの表われとする西欧人との間には、相当大きなギャップがあるようである。いずれにしろ、依存欲求の底には対人的な信頼感がある。それをそのまま、世界に対する信頼感といえ代えてもよい。

さらにいえば、対人的な信頼感とは自分自身に対する信頼感のあればこそである。十分な愛情に育まれた幼児は、究極において世界が自分に対して肯定的であるとする漠然としたムードをもつ。それは本来、そのような扱いを受けるのが当然だとする自信につながっている。それが、世界が肯定的に接してくるのにふさわしい価値が自分にはある、という基本的な自信に基づくものだからである。だから成人になっても人を信頼できぬ人は、多くの場合そのような基本的安定感に欠けている、と考えてよい。それを何らかの外的枠組でカバーしようとするので、現実的には“成功”している場合が少なくない。しかし何かのきっかけでその不安全感の露わになることは、フランクルのあげている自家用ジェット機を買おうとして心理的に破綻した会社社長の例<sup>29)</sup>に明らかである。

この被験者に陰影反応の欠けていることは、だから、一つには愛情欲求が十分に発達していない、したがっておよそ人を信頼できぬ精神病質的な性格、もう一つは、愛情欲求を抑えこんでその面をいわば切り捨てて生きていることを示唆するものである。それらの弁別は、個々の反応、とくに陰影カードと呼ばれるIVカードとVIカード、それにVIIカードに対するものを検討する必要がある。この被験者の場合、それらの考察は次の継列分析の所で行うのでここではとり上げない。いずれにせよ、対人的に根強い不信感があるから、たとえカウンセリングが始まってもなかなかラポールはつきにくいものと思われる。もちろん、ある程度の常識はあり、内的エネルギーが欠けているわけでもないから、表面的には当り触りのない関係を維持できるかもしれない。それとて、カウンセラーの側から色彩反応の所でのべたような、配慮のゆき届いた関わり方をすれば、のことである。もしカウンセリングのプロセスが意外に進んで、この人の本質的な問題に迫ることがあるとすれば、事が基本的信頼感に関わるだけに、相当ひどい退行、それに伴う投影をひき受けるだけの覚悟がカウンセラーには必要である。だから、ある程度対人関係が改善されて何とか現実適応が可能になった所で、一まずカウンセリングを打ち切ることがあ

てよいかもしれない。ロールシャッハのスコアでいえば、色彩反応レベルで改善がみられたならば、あえて陰影反応レベルにまで問題を掘り下げることが当分考えない方がよい、ということである。

#### e ま と め

かつて精神病ということ入退院をくり返していたとすれば、現在の状態はかなり良好である。内的エネルギーも十分にあり、これが建設的に使用されるようになれば一層の現実適応が可能になるものと思われる。ただし現状では、対人関係に対する意欲は認められるけれども、実際にはスムーズな関係を維持するだけの力がない。時に幼児的な態度を示すことがあり、それが一層スムーズな対人関係を難しくしている。そこで自分なりの空想世界に逃げこむと、それに必要な内的エネルギーがあるだけに、かえって現実に向ける可能性がある。しかしこの人の最も深刻な問題は、対人的な不信感、さらにはその基盤にある基本的安定感に欠けるところである。おそらくそれが、この人の発症と密接な関わりをもつであろうが、その問題にとり組むには時期を待たねばならない。さし当てる問題としては、当面どのような形で現実復帰が可能かを考えることであろう。この人は、自分の根本的な問題に触れることなく、表層的ではあるが何とか現実の要請に対応するべく努力しているし、ある程度それは成功している。だから治療的な働きかけの方向も、当分の間は現実適応に向けられるべきである。具体的にはある程度感情的に人と関わられるようにならねばならない。社会復帰のためにはそのための訓練が必要で、カウンセラーとの親密な関係がかなり役に立つはずである。ただし、そこまでのラポールの成立する以前に、前述の対人的不信感から関係の中断する可能性が大きい。

#### 2. 継列的内容分析

##### I カード

第1反応に5秒でPのコーモリを出している。この人ははじめてこのテストを受けたのかどうかは不明である。(入院歴があるので、どこかでこのテストを受けている可能性がある)。その点多少問題があるが、本来第Iカードは、とくにこのテストをはじめて受ける場合、被験者にとっては多かれ少なかれ不安をひき起こす、なじみのない刺激場面である。それに対して動揺を示さず、人並みの反応ができるというのは、この人の状態がかなり軽快しているからかもしれない。第2反応は仮面である。S部分を目とみている。形体的には問題がないから、現実吟味能力が低下しているわけではない。しかしこれは、世界がまるで仮面をかぶった無気味な存在としてこの人にみえている可能性を示す。S部分が目とされているが、

Beck は目の指摘をほとんど例外なくパラノイア傾向の表われとしている<sup>30)</sup>。そこまでゆかずとも、この人が、外界をもう一つ得体の知れぬ脅威的なものとしてみている可能性は強い。さらにいえば、この仮面は逆にこの人自身が世界に向かう時身につけるもので、どうにも本音でつきあい切れぬもどかしさ、極端に言えば離人症の始まりのごときものがあるのかもしれない。I—d でのべたように、この人の対人的不信感が、対人関係を実感を伴わぬ単なる役割関係におとしめているのであろうか。

## II カード

第1反応でMの、かなりよい反応が出ている。しかし、手を合わせているとはいうものの、なぜそうなのかの説明がない。二人の人物は、多分何らかの関わりあいを求めているのだが、具体的に何のためにどのように関わってよいのか明らかでないであろう。ただその関係は、少なくとも功利的なものではない。さりとしてどの程度親和的なのかもあいまいなままである。I—b でのべた、対人関係におけるアンビバレンツが、運動感覚的にもどう関わってよいのか納得できていないためかもしれない。この被験者のMは全部で4つあるが、IV—2を除いてすべて2人の人物を見ている。しかし二人の関係は、このカードの場合よりもさらにあいまいである。もちろんこれらの人物を、外界での人間関係というよりは、内的なものと考えすることもできる。その場合は、おのれの内部に対立する二つの動きをみながら、それをどう統合してよいか分らぬ状態を反映している、と考えてよい。しかし、問題がその程度にまでは意識化されつつあるという意味では、それが何がしかの緊張をもたらすにはしろ、肯定的な可能性を含んでもいる。第2反応の骨盤は、AtというよりはSex反応とみなすべきだ、という考え方が<sup>31)</sup>。しかし、それがAtにとどまったというのは、やはりこの人の自我のコントロールが相当回復しているから、と考えるべきであろう。逆にいえば、性の問題に直面するのを避けることで、精神のバランスを保っているといえるかもしれない。同様に人間関係に深く入りこむことがひょっとしてこの人のルサンチマンを暴発させ（IXカードの水爆）、それを避けるため、ことさら第1反応にみられるようなあいまいな関係を二人の人物の間にみる、といったメカニズムが働いているのかもしれない。なおテスターの質問に対して、下の赤色部分の使用を否定しているのは、情緒的な刺激を切り捨て無視するだけの強さのあることを示している。

## III カード

ここでの反応は一つであるが、II—1と同じく、2人

の女性像をみながら、その関係は今一つはっきりしない。「欲求不満か」という呟きを洩らし、検査者に問いかけられて答えてないようであるが、実際はどうであったのか。表面の反応とその際に感じていることの間に少しズレがあるのであろう。赤の部分にはまったく言及がない。Pレベルの形体性があれば、色彩に捕えられることはないのであろうか。

## IV カード

ここでカード回転についてはじめて指示されているらしいので、ここでの第1反応がC方向であることにとくにこだわる必要はないと思う。今まで自分なりに、反応はすべてA方向と思いこんでいたらしいことが明らかになり、ややリジッドな、しかしそれによって何とか現実に合わせている、ある意味では積極的な態度がうかがわれる。さて、第1反応はハネを広げたチョウである。この人のFMは他にVカードのトリとIXカードのワジで、すべて空を飛ぶものである。Piotrowskiによれば<sup>32)</sup>FMはいわば子ども時代のMだという。だからMの動きとFMの動きとにズレがあれば、それは、小児的な態度とおとなとしての態度の間にズレのあるしるしなのである。いずれにしろ、この人には飛翔のイメージがある。このカードがいわゆる陰影カードの一つであることを思えば、そのような、現実から離れて観念のレベルに逃避する傾向があるのかもしれない。ただし、形体水準が崩れていないから、それで現実吟味能力が損なわれているわけではない。第2反応は男性像である。下から見てるとというのが、あるいはFKの感じを含んでいるかもしれない。足を地につけた男性で、やはりちょっと距離があるのであろう。黒いから男というのは、そのような距離感からくる抑鬱的な感じの反映であろうか。このカードはしばしば父親カードともいわれるが、男性化—おとな化ということに抵抗感があるのかもしれない。陰影に対する感受性は、ないとはいえないようである。

## V カード

このカードにはWのPがあり、10枚のカードのうち最も反応しやすいといわれている。しかしこの人は、Pを出したものの22秒もかかり、反応は一つで終わっている。ここで動揺を起こすとすれば、だからブラックジョックではないか、といわれることがある<sup>33)</sup>。深い抑鬱感が隠されているのかもしれない。しかし反応そのものはPのFMであり、問題はない。

## VI カード

これも陰影カードである。運動は認められないが内容は超音速旅客機で、やはり空を飛ぶものである。IV、V、VIと、飛翔のテーマが続いている。陰影と黒に対する



忌避が、宙に浮く反応を選ばせるのであろうか。しかし、翹うべき大地のない飛翔には、墜落しか約束されていない。ロールジャッパの内容としていえば、大地がどんな形でこの人の世界に現われてくるか、興味深い所である。否定的な形で現われているにせよ、ここでも、この人の陰影に対する感受性はあるとみたい。

## VII カード

第1反応は地図である。地図は、図版によって触発された不安を知的に処理しようとする場合に生じ易い、といわれている<sup>34)</sup>。ただしこの反応では、アジア、アメリカなどと地域が特定されているから定形である。形体水準も1.0レベルであり、不安の処理は成功している。ただし、ここではじめて今までのこの人の反応パターンが崩れたことに注目したい。つまり最初のDが生じているのである。Dも又、不安を処理するために視野を狭め、日常的レベルで問題を解決しようとする態度の表われである。だからWとしてのこの図版が、被験者に何らかの不安をひき起こしたことは間違いない。不安の原因については、このカードがしばしば女性像と見られ、時に母親カードと呼ばれること、またそれとの関連で全体に柔い感じの陰影をもつことが考えられる。IIIカードで被験者は、「欲求不満か」と呟いて検査者に聞きとがめられているが、それは女性像というよりは母親像のせいであったのかもしれない。この人が母親とどんな関係をもっていたかを、このテストだけから明らかにすることはできない。しかし、1で考察したように、この人に十分な基本的安定感が育っていないとすれば、やはり母親との関係に問題があったのではないか。だからWの忌避が母親イメージの忌避だとすれば、それは、問題を漠然と感じたからこそその忌避に他ならない。まったく感じられない場合には、避ける必要もないからである。かつ、そうした忌避は第1反応によってみる限り、現実吟味能力をこの人から失わせていない。それだけ成功しているのである。反応がWからDに変わったこと自体、局面に応じて態度を変えることのできる、一種の柔軟性の現われである。

さて、第2反応はWの女性像二人である。ここでこの人は、本来の反応パターンをとり戻したといえる。しかし二人の人物の関係は、むしろないといった方がよい位に薄い。ただここで女性像を見得ることは、IVカードで男性像を見たのと同じく、この人が自らの直面すべき問題に、まったく気づいていないわけではないことを示している。付加反応にmのあるのは、その場合、どうなるか分らない不安があるからであろう。

## VIII カード

最初の全彩色カードである。唯一の色彩反応が出てい

るが形体水準は0.5に落ちている。ただし、PのDを組みこむことで、1.0に回復している。ガラスというのは少し陰影の感じがある。いずれにしろ、情動場面ですっかり混乱してしまうことはなさそうである。きれいな置き物には、少し顯示欲めいたものがある。

## IX カード

このカードではD反応が二つでWがない。VIIカードでみたように、これもこの人の柔軟性の表われとみておきたい。しかし第1反応は水爆によるキノコ雲である。スコアはしていないがKFの可能性もある。この人の内部に、爆発すればどうにもならないエネルギー、多分攻撃的なものがあるのかもしれない。Kのカテゴリーは、いわば胎内感情ともいふべき未分化な母子一体感に基づいている、と私は考えている。cの場合は表面の材質感であり、スキンシップといってもお互いの自我境界が明確である。Kの場合はそれ以前のもっと基本的な感情だといえよう。だからといって、こうした反応自体が病的なものというわけではない。いわゆる自我に支えられた退行<sup>35)</sup>が、創造性と密接につながることはいうまでもない。要は自我との関わりがどうかということなのである。それがDで形体優位の反応として出ていることは、その点安心させる所がある。第2反応は、第1のキノコ雲の立ち昇るその場所に、果物の断面をみている。ここで果物は、PIというよりFoodとしてスコアしたい。この人の口愛期における問題が示唆されるからである。そこに種があるのは、文字通り成長の種がそこにあるからと考えてもよからう。爆発と胎内感情と食べ物と種と。この人の問題がそのまま羅列された感じがある。可能性ということになれば、この種は育てなければならない。しかし大洋感情への復帰は水爆の爆発と裏腹である。キノコ雲の反応には色彩の関わっている可能性もある。だとすれば、この人にとって可能性の芽ともいふべきものが、同時に危険の源でもある。よいとこ取りはできないので、そのへんの展開を慎重に考えるべきことはすでにのべた。

## X カード

第1反応はワシである。色彩の世界を飛翔することで越えようとしているのであろうが、谷は深そうである。少しFKの感じがある。だとすると、自らワシとなって脱出するというよりは、谷の中から高みのワシを仰ぎみることになる。しかし形体は崩れていない。第2反応の仏像は、おそらく彩色部分を避けた結果のことであろう。台としてD<sub>6</sub>が用いられるのは第1反応の谷の場合と同じである。全彩色という情緒的な場面の、背景から浮かび上がったものが仏像だというのは、この人が、人間的な関わりの向うに超越的なものを求めているからかもしれ

ない。すでに第1反応のワシに、それに近いニュアンスがある。しかし両者共D<sub>8</sub>を背景として必要としているのは、超越的志向がやはり情緒的な現実場面を踏まえてこそなり立つことを意味しており、それだけこの人が、非現実的世界にとり込まれる可能性が少ない、ということでもあろう。形体性の悪くないことがそのことを裏づける。

### 3. 所 見

現在被験者は一応の安定期にあり、それ程奇矯な思考ないしふるまいはないはずである。しかし、対人関係はいわゆる自意識過剰的な態度のためにスムーズにゆかない。本人は、表面的な関わりでとり繕っているが、やはりもう少し深い感情的な関わりを求めているが、かつ、そのために傷つくことを怖れているので、接近することもできない。したがって一切の人間関係が緊張の満ちたものになりやすい。日常的な場面で、時にかなり未分化な感情を爆発させることがあるので、一層緊張の高まる可能性もある。そのため一定時間以上、特定の人と関わりあうことが難しく、したがって早急な社会復帰はまだ期待できない。

基本的な問題は、多分生育歴に関わる基本的安定感の不足であるが、それが思春期、青年期の自立の問題と絡まって顕在化し、発症したものと思われる。当人にはうすうすその事が気づかれているが、まだその問題に正面からとり組むだけの力はない。しかし、回復に必要なだけの内的エネルギーはあり、それを現実場面はどうつないでゆくかが問題である。できるだけ配慮された人間関係の中で、他者に認められ受け入れられる経験が必要である。芸術療法および作業療法など効果があるかもしれない。それが何らかの人間関係を含みながら、作品が媒介となるために、直接的な人間関係のもつ脅威的な面が薄くなるからである。

### お わ り に

32才の、かつて精神病と診断された男性のロールシャッハプロトコルに解釈を施した。もともと研究会に提出されたものに筆者がコメントを加えたものであるため、若干解説的な部分が多くなった。このテストに関心をもつ人々の、臨床的な解釈技法の向上に少しでも参考になれば幸いである。

### 文 献

- 1) 氏原寛 ロールシャッハテスト解釈例(その1)  
臨床心理学研究 第9巻3号 180~187 1970
- 2) 氏原寛 ある修道尼のロールシャッハテスト解釈  
大阪外大学報第51号 75~91 1981
- 3) 日本臨床心理学会(編) 心理テスト その虚構と現実 現代書館 1979
- 4) 中村雄次郎 魔女ランダ考 岩波書店 1984
- 5) Schafer, R. Psychoanalytic interpretation in Rorschach testing Grune & Stratton 1970
- 6) 辻悟他 阪大スケール 児玉他(編) ロールシャッハテスト I 中山書店 1958
- 7) Klopfer, B. et al Developments in the Rorschach technique I Harcourt, Brace & World 1954
- 8) Jung, C. G. Psychological types Princeton Univ. Press 1971
- 9) ロールシャッハ, H. (片口安史訳) 精神診断学 金子書房 1979
- 10) 同書
- 11) Beck, S. et al Rorschach's test I Grune & Stratton 1971
- 12) Klopfer, B. et al op. cit.
- 13) Piotrowski Z. A. Perceptanalysis the McMillan 1957
- 14) Rapaport, D. et al Diagnostic psychological testing International Univ. Press 1972
- 15) Schachtel, E. G. Experiential foundations of Rorschach's test Tavistock 1967
- 16) エイムス L. B ほか(村田, 黒田訳) ロールシャッハ 児童心理学 新曜社 1976
- 17) Klopfer, B. et al op. cit.
- 18) ロールシャッハ, H. (片口安史訳) 前掲書
- 19) Beck, S. et al op. cit.
- 20) 高橋雅春 描画テスト診断法 文教書院 1967
- 21) 片口安史 心理診断法詳説 牧書店 1863
- 22) Schachtel, E. G. op. cit.
- 23) Shapiro, D. A perceptual understanding of color response in Rickers-Ovsiankina(ed.) Rorschach psychology John Wiley & Sons 154~201 1965
- 24) ロールシャッハ, H. (片口安史訳) 前掲書
- 25) Bohm, E. A textbook in Rorschach test diagnosis Grune & Stratton 1958
- 26) ハーロー, H. F. (浜田寿美男訳) 愛のなりたち ミネルヴァ書房 1978

- |   |   |
|---|---|
| 28) Klopfer, B. et al op. cit.                                    | 32) Piotrowski, Z. A. op. cit.                                      |
| 29) フランクル, V. (宮本, 小田訳) 神経症 I みず<br>ず書房 1963                      | 33) Klopfer, B. et al op. cit.                                      |
| 30) Beck, S. et al Rorschach's test II Grune & St-<br>ratton 1967 | 34) ibid  |
| 31) Klopfer, B. et al op. cit.                                    | 35) Kris, E. Psychoanalytic exploration in art<br>Shocken Book 1967 |

(昭和59年11月6日受理)

### Summary

The author interprets a Rorschach protocol of a 32 year old man who has been diagnosed as schizophrenia.

This report is based upon the author's comment on the protocol presented to a certain case conference. Therefore, it contains, the author is afraid, comparatively too many explanations.

The author will be happy that this report may help the students to improve their clinical use of this technique.